

日の暮れるのが早くなり、秋風の冷たさを感じる季節となりました。
現在会員登録数 4,803 人さま。次号は 11 月 20 日発行の予定です／

＋-----◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----＋

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

《5》宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

《6》富安陽子 I I C L O ストーリーコンペ 第3回

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

＋-----＋

■-----■
【1】お知らせ

● イギリスの絵本作家ローラ・カーリン、まもなく来日！

◇国際講演会「こころを自由に解き放つ ローラ・カーリンが創る絵本の世界」

日時：10月31日（土） 13：00～16：00 ※参加費 1000 円

※詳細、お申し込みは ↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/02_lecture/index.html#081031

◇ワークショップ「イギリスの絵本作家 ローラ・カーリンさんと絵本をつくろう」

日時：11月1日（日） 13：00～16：00 ※小学生対象、参加費 500 円

※詳細、お申し込みは ↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/01_kids/index.html#081101ws

● 〈日本児童文学のはじまりをたどる 巖谷小波の絵はがきネットワーク〉

◇講演会「巖谷小波と絵はがき」

児童文学の祖と言われる巖谷小波のご令孫で、小波の絵はがきコレクションを所蔵されている巖谷國士先生に、絵はがきから読みとれる小波の「家族」や「旅」、絵はがきの歴史などについてご講演いただきます。

・日時：12月13日（日） 13：30～16：00

・講師：巖谷國士（明治学院大学名誉教授）

・研究報告者：土居安子（IICLO 理事・総括専門員）

・場所：大阪府立中央図書館 多目的室 ※定員 50 人、参加費 1000 円

※詳細、お申し込みは ↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/02_lecture/index.html#081213

● 第 162 回 日本児童文学学会関西例会（IICLO 共催）

◇講演「『シンビアパート』のトッケビと『妖怪ウォッチ』の妖怪キャラクターの比較を中心として 現代アニメーションにおける伝統的怪異の変容様相」

（講師：朴美暎（大谷大学）） ほか研究報告

・日時：10月25日（日） 13：15～16：00

・ 場所：大阪府立中央図書館 多目的室 ※定員 70 人、参加費無料

※詳細、お申し込みは ↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/02_lecture/index.html#081025

● «ご寄付をお願いします»

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html

※Syncable（シンカブル）＝継続寄付（毎年／毎月）、単発寄付が選べます。

→ <https://syncable.biz/associate/19800701>

■ ----- ■
【 2 】 コ ラ ム
■ ----- ■

《 1 》この本読んだ？ Yasuko's & Noriko's Talk

『ぼくの名前はサミー』(フィダン・ミークル/作 もりうちすみこ/訳 み
うらし～まる/装画 鈴木出版 2026 年 9 月) 対象年齢：中学生以上

* 今回のゲストは日中児童文学研究者の浅野法子さん（N）です。

あらすじ：アフガニスタンから旅をしてきた 13 歳のサミーは背が高かったため、大人と決めつけられてイギリスの収容所に入れられていたが、年齢が判明し、里親のブラウンさんの家に預けられる。難民申請をするため、サミーは家族が死んだこと、故郷で隣に住んでいた同い年のゼインと何度も命の危険に陥りながらフランスまでやってきたことを語る。一方、イギリスの中学校では、チェスクラブに入るが、チェスがうまいマックスに目をつけられ、暴力事件にまで発展する。サミーは、幽霊のゼインに心の中で語り続けながら、難民申請の結果を待つ。

N：一気に読みました。

Y：難民の少年のサバイバル物語という題材とともに、読ませる工夫が幾重にも見られます。

N：作品の中でサミーの「現在」は、イギリスの里親の家で、学校に通っています。そして、難民申請のために、弁護士やソーシャルワーカーにアフガニスタンを出てから「現在」までを語ります。

Y：トルコで男の子のふりをしていた少女ダーリヤのことだけは、弁護士たちにではなく、同居している同い年のエリトリア人のリタに語ります。いずれにせよ、読者は、弁護士やリタという聞き手の側にたってサミーの体験を知ることになり、その距離が、サミーの経験を冷静に受け止められる仕掛けになっています。

N：その語りの中で、サミーは「ゼインこそ、ここにいるべきなんだ。ぼくじゃなくて。」と言い、親友で死んでしまったゼインに対して罪の意識を感じていることを吐露し続けます。そこで、読者は、サミーとゼインに何があったのか知りたいという気持ちで読み続けます。

Y：サミーは、冒頭から幽霊のゼインと対話をします。ゼインは突っ込み役で、いつも窮地に陥ったサミーを笑わせてくれてリラックスさせてくれます。幽霊のゼインは、もちろん、もう一人のサミーですが、幽霊のゼインを見ることで、自分を客観的に見ることができ、「笑い」が生きる力になることが読み取れます。

N：サミーが自らの体験を語ることは、難民申請のためであると同時に、

自分が出会って助けてくれたり、必死で生きようとしたり、命を落としたりする人たちの「名前」を残すためだという点も心に残りました。

Y：「読ませる」という点でいえば、サミーの過去の語りの間に、彼のイギリスでの生活が描かれます。そのことによって、サミーがいかに重荷を背負って毎日を生きているかが想像できます。そんな中、難民の同級生や、体は女子で心は男性のレンズなどを執拗に差別し、いじめぬくマックスが登場し、二人の関係がどうなるかが気になります。そして、難民申請が承認されるかどうかも知りたいと思って読みます。

N：最後の方では、サミーとマックスの関係、難民申請の結果、ゼインがどうなったかなど、「そう来るか」と思いながら読みました。

Y：私も、語りの力に圧倒されていただけに、最後の解決の仕方についてはどういう意味かを考え続けています。ただ、サミーがただのいい子だと書かれていなかったこと、そして、それが難民であるからこそ、死と隣り合わせの結末につながる事が書かれていたことは、難民の子どもたちがいかに理不尽な状況に置かれているかが読み取れてとても説得力があると思いました。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第133回 「種山ヶ原」

夏の終わりの夢

種山ヶ原は、北上山地のまん中の高原です。

〈春になると、北上の河谷のあちこちから、沢山の馬が連れて来られて、此の部落の人たちに預けられます。そして、上の野原に放されます。それも八月の末には、みんなめいめいの持主に戻ってしまうのです。なぜなら、九月には、もう原の草が枯れはじめ水霜が下りるのです。〉

「雲がちぎれ、風が吹き、夏の休みももう明日だけです。／達二は、明後日から、また自分で作った小さな草鞋をはいて、二つの谷を越えて、学校へ行くのです。」——達二は、お母さんにいわれて、上の原のすぐ上り口で草を刈っている、おじいさんと兄さんに弁当をもって行きます。牛もつれて行って、草を食べさせなければなりません。ところが、お兄さんが、もうすぐ曇るといって、向こうで仕事をしているあいだに、急に牛が逃げ出してしまいます。

達二は、「牛あ逃げる。牛あ逃げる。^{あい}兄な。牛あ逃げる。」と叫びながら追かけますが、達二自身が迷子になってしまいます。空が暗く重くなってきます。——（間違っ^てて原を向う側へ下りれば、もうおらは死ぬばかりだ）

「空が旗のようにぱたぱた光って翻えり、火花がパチパチパチッと燃えました。」——達二は、草にたおれてしまいます。そして、夏休みにみんなと踊った剣舞のようす（ダー、ダー、ダー、ダー、ダースコダーダー。）や、もう学校がはじまったのか、教室の景色や、小鳥を欲しがる女の子、達二をさらおうとして小脇にかかえる山男……幾重にも重なる夢のように見るのです。

やがて、達二が眼をあけると、すぐ眼の前に、牛がのっそりと立っていました。「おい。達二。居るが。達二。達二。」と兄さんの声もかすかに聞こえます。ようやく空が明るくなりました。

この「種山ヶ原」は、「風の又三郎」の「九月四日」の章に転用されます。牛を追いかけて道に迷った達二は、逃げた馬を追いかける嘉助として、もう一度、描き直されることになります。明後日、学校がはじまったら、転校生（「風の又三郎」に登場する高田三郎）がやってくるのかもしれませんが。（馬車別当）

（本文の引用は、新潮文庫版『ポラーノの広場』によりました。）

《3》子どもの本の珠玉のことば 88

「ラミ、きみが話してくれてるのは、おれたちの物語なんだよ」と、ユセフ。ノルもうなずく。

「わたしたちの物語でもあるわ」

バシャールは、ハッサンとユセフの顔をかわるがわる見ていたが、やがてラミにたずねる。

「だけど、白馬はどうなったの？ スーホはまた会えたの？」

「しーっ！もうすぐラミがつづきを話してくれるからね」

とムスタファが言う。

ラミがバイオリンの弓を持ちあげると、風がはこぶ涙のように音があふれ出す。ラミがつづきを語る。

（『風がはこんだ物語』ジル・ルイス/著 ジョー・ウィーヴァー/絵 さくまゆみこ/訳 あすなろ書房 2018年9月 p.61）

対談で紹介した作品と同じく難民のことを描いた作品です。13回の冬と14回の夏を過ごしてきた少年ラミは、エンジンが止まり、海に漂うビニール製のボートに細長いケースを抱えて乗っています。ボートには、6歳のバシャールと4歳のアマニ、母ノルと父ムスタファの家族、老人モハンマドと犬、青年ユセフとハッサンの兄弟が乗っています。

乗客たちは、ラミにショールや食べ物や飲み物をくれようとはしますが、ラミは返すものがないと言って何も受け取りません。ラミは、ボートに乗っている人たちに、抱えているケースの中にはバイオリンが入っていることを見せます。そして、「わたしたちがこの夜をなんとか乗り切るための物語を聞かせて」というノルの依頼に応じて、「兵隊がやってきた日に、オーケストラの指揮者がぼくに話してくれた物語」をバイオリンを弾きながら語ります。

それは、若い羊飼いのスーホと、スーホが雪の中で死にそうになっているのを見つけ、育てた白い野馬の物語（日本では「スーホの白い馬」として知られている）でした。引用にあるように、場面が変わるごとに、ボートに乗っている人が、これは自分の物語だと言い、過去の楽しい思い出や苦難を語ります。

音楽と、生と死と、人と動物の深いかかわりを描いた物語がいかに人々の空腹や死への不安を忘れさせ、自らの物語を語ることによって、人々がいかにお互いを理解することができるかが作品から伝わります。「風がはこぶ涙のように音があふれ出す」のような詩的な言葉と、ボートに乗っている人々が心の中で描いている風景と現実の風景を描いたたっぶりの絵が、難民の人たちの豊かな生と、困難を如実に描いています。（Y）

《4》 行って来ました！

美術館「えき」KYOTOで10月25日まで開催されている「宇野亞喜良展 AQUARAX UNO」に行ってきました。宇野亞喜良が描いた広告などの原画やポスター、絵本や書籍の挿絵や原画、アニメーション映像、絵画、立体作品、舞台美術など500点以上が展示されていて、「華麗で耽美な」(HPより)宇野亞喜良ワールドに浸ることができました。

全体は12章で構成されており、第1章「プロローグ 名古屋時代」、第2章「グラフィックデザイナー 宇野亞喜良」、第3章「企業広告」、第4章「アニメーション映画」、第5章「ポスター」、第6章「絵本・児童書」、第7章「版画集・作品集」、「人魚姫」、第8章「新聞・雑誌」、第9章「書籍」、第10章「絵画・立体作品」、第11章「舞台美術」、第12章「近作・新作」となっていました。1934年生まれで現在92歳の宇野亞喜良が、1950年代初めのデビュー以来いかに幅広いジャンルで第一級の仕事をしてきたかがわかります。

特に印象に残った作品に、「カシミロン」(旭化成工業)ポスター(1960年)がありました。「おもさをわすれた《センイ》」というコピーがついているように、布が羽ばたく鳥に変身していく過程が描かれ、布がいかに軽いかが視覚的に感じられます。また、「三井信託銀行」のポスター(1971年)は、存在感のある美しい花で飾られている帽子をかぶった「眉毛を剃って長い睫毛に物憂げな表情を浮かべる」女性が描かれています。引用は、この展覧会を監修した、刈谷市美術館の学芸員松本育子さんの図録の解説「宇野亞喜良のイラストレーションーその魅力の在り処をめぐって」によります。そこには「「宇野亞喜良スタイル」の女性たちが街を闊歩し、時代のファッションを牽引したようだ。」と書かれています。

絵本や児童書の絵も展示されていました。その中には、1957年に出版された『青い鳥』(堀尾青史/著 エンゼル社)の絵本の原画もありました。大人用のイラストレーションとは異なるふっくらしてにっこり笑う子どもや動物たちが登場し、「青い鳥」の不思議な世界を表現しています。

そのほか、さまざまな少女や女性の妖艶な絵、ねこの絵の魅力にも圧倒されました。演劇やバレエのための立体的な作品も興味深く、特に、ダンス・エレマンの「美女と野獣」のかたつむりの被り物や、Project Nyxの人形劇『星の王子さま』の人形にも目を奪われました。

自分はなぜこれを美しいと感じるんだろう、「美」って何だろうと思いながら、展覧会を後にしました。(K)

美術館「えき」KYOTO

<https://www.mistore.jp/store/kyoto/museum.html>

《5》 宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

第7章 天沢退二郎先生

その2 『月曜児童文学』

1982(昭和57)年2月13日の夕刻、パリ10区ボン・ヌーベルの韓国料理「竹

園」で私たちが食事をはじめたころ、日本人の男性ふたりが店に入ってきて、となりのテーブルに案内されました。ひとりは、天沢退二郎先生（1936～2023年）でした。

この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとらえ直しも試みます。ご愛読ください。

<本編はこちらから>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta.html

《6》 富安陽子 I I C L O ストーリーコンペ 第3回

第3回「富安陽子 I I C L O ストーリーコンペ」結果発表！

◎ 第1位 「なきすな駅のベンチ」 木尾文香/作

※ 富安陽子理事長の手描き表彰状を贈呈します。

◎ 第2位 「じっちゃんの海にかかる橋」 ひしかわりえ/作

《講評》

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/storycompe-3kekka.html

木尾文香さん、ひしかわりえさん、おめでとうございます！

《総評・第3回》 理事長 富安陽子

今回のキーワードは、トビウオとくつ下。皆さんは、いかがでしたか？おおよそ無関係な、この二つの言葉をどうやって物語の中に取り込み、どう関連づけようかと頭を悩ませたのではないのでしょうか？

コンペも三回目となり、10枚の物語作りという課題には、みんなだんだん手馴れてきたなという印象を持ちました。変に尻切れトンボだったり、妙に詰め込み過ぎだったりする物語は減り、手堅くまとめられた作品が多かったように思います。

反面、イメージの広がりという点では、まだまだ成長の余地がありそうです。トビウオにくつ下をはかせる、というストーリーが何篇もありましたが、別に二つをくつつける必要はないのです。もっと自由に、もっと様々に、キーワードからイメージを広げてみて下さい。次回、第4回のストーリーコンペで、皆さんの新しい物語に出逢えることを楽しみにしています。さて、次のキーワードはなんでしょう！

I I C L O ストーリーコンペは、年2回。

次回のキーワードは11月20日（メルマガN0.195）に発表します。

（1位、2位のおふたり、面白いワードをよろしく！）

応募締め切りは2027年2月2日です。

物語づくりの上達の決め手は、とにかく、たゆまず、書き続けることです。

さあ！物語を書きましょう。

皆さんの、面白いお話を待っています！

<富安理事長の参考作品はこちらから>

「蔵守猫の話③」

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/storycompe-3kekka.html#ref-3

<詳細はこちらをご覧ください>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/storycompe.html

■ ----- ■
【3】全国のイベント紹介

●企画展「Made in としまの紙芝居～日本画劇が残したもの～」記念講演会
& 紙芝居実演「豊島区ゆかりの戦後紙芝居 - 日本画劇株式会社の足跡 -」
講師：浅岡靖央（児童文化研究者）
日時：11月7日（土） 14：00～15：30 ※定員 70 人、無料、要申し込み
場所：としま産業振興プラザ 6 階多目的ホール
主催：豊島区立郷土資料館

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

■ ----- ■
【4】プレゼント

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『ぼくの名前はサミーム』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1) お名前 (2) 郵便番号・住所 (3) 電話番号 (4) メールアドレス、よろしければ (5) このメルマガのご感想をお書きのうえ ご応募ください。

応募フォーム⇒ <https://forms.gle/uL2TpNhMEYWJpnQ9A>

締切は11月10日（火）、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

—「—」—「—」—「—」—「—」—「—」—「—」—「—」—

秋祭りや運動会、美術展など秋ならではの行事が続いています。雨が続いていた毎日から、秋晴れの日々ともなれば、ついどこかに出かけたくなります。大阪の紅葉はまだ早いようですが、今、見ごろのコスモスを見にいきたいと思っています。(TA)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>
〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内
TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp